特集《通巻 900 号記念　パテント誌編集時代の想い出》

パテント誌とともに七転び八起き

会員　中村　恵子※

１．会誌編集部に入ったきっかけ

１．１　会誌編集部に入ったきっかけ

会誌編集部にはいったきっかけは、所属する会派の幹事長からの「委員会活動に興味はありますか」というお電話でした。その際に会誌編集部が候補として挙げられたので、「希望します！」と即答しました。もともとパテント誌の活動に興味がありましたが、応募方法をよく知らなかったものですから、まさに「渡りに船」といったところでした。

１．２　編集作業に興味をもったきっかけ

そもそも編集作業に興味をもったきっかけは大学時代まで遡ります。資格試験予備校でアルバイトをしている頃に、受付や通信教材の発送作業や、模範答案集の編集に参加しました。校正作業はありませんでしたが、掲載依頼や版下受領などもしていました。同姓同名の合格者と不合格者を取り違えて合格者に最終成績を問い合わせてしまうという失敗もしました。それでも、出版にまで至ったときには格別の喜びがありました。

２．編集部在籍時代の編集体制やパテント誌の役割

２．１　編集体制について

当初、6 班が年に 2 回、担当月の特集原稿の企画・査読と一般投稿原稿の査読を同じ月に行っていました。短期間で、10 本以上の原稿を査読し、執筆者に査読結果をお知らせし、必要があれば修正を依頼します。単純な誤字や誤記のチェックだけでも負担のかかる作業です。

ここで、一人の勇者もとい賢者が登場します。各班の特集原稿担当月と一般投稿原稿担当月を分けるという提案があったのです。この体制に変更した結果、2018 年度から査読回数は年 4 回となりましたが、1 回あたりの査読負担は半減しました。

２．２　パテント誌の役割について

パテント誌は日本弁理士会の会誌です。したがって、会員間の情報交換や親睦を高めるという側面があります。その一方で、知財分野の法律専門誌になるという理想もあります。なお、この理想は既に達成されたと思われます。

３．編集部員時代の想い出

３．１　印象に残っている特集企画

東日本大震災とその後の復興関連の特集企画です。まだ、震災から数年しか経過しておらず、生々しい記憶が残っている時期でした。知財教育活動の特集でも、震災の被害にあった会員や福島大学で活躍されている会員の原稿をいただきました。今でも思い出すと、少し胸の奥が苦しくなるような、同時に温かいものがあふれてくるような複雑な感情が湧いてきます。

３．２　編集活動で大切にしたこと

一言でいうと「中立性」です。会誌という性格上、パテント誌に掲載された原稿は、日本弁理士会の意見を代表するものと捉えられる可能性があります。公平・中立の観点から査読された原稿であることを納得いただけるような編集を心がけました。

※ 平成 23 年度、平成 30 年度広報センター会誌編集部部長

審査・審判・訴訟等の当事者・関係者が当該事件について執筆した原稿の掲載は、他の当事者・関係者から中立性に疑念を抱かれる可能性があるため、掲載の判断を慎重に行いました。そのため、「判断が厳格すぎる」というご批判もあったかと思います。

４．編集責任者時代の想い出

４．１　楽しかったこと

会誌編集部にはマニアックな方が多く、専門的な知識も豊富で、毎回の部会では活発な議論が行われました。また、お酒を飲む・飲まないにかかわらず、温和で話好きな方ばかりで、飲み会は盛り上がりました。私は若干お酒好きなので、ここでは書けないような失敗も数知れずあります。「知財管理」編集部との交流会では三次会まで行きましたが、その後交流が途絶えてしまったので、何かやらかしているかもしれません。

４．２　苦しかったこと

会誌編集部の皆様はよくご存知と思いますが、編集責任者時代はクレーム対応の思い出ばかりです。「会誌編集部です」と話すと、「お疲れ様です」、「ご愁傷様です」と言われることが多かったのですが、その後しみじみと意味を理解しました。

４．３　それでも楽しかったこと

とはいえ会誌編集部には頼りになる先輩・同僚が多く、やはり楽しかったのです。一から編集作業を教えて下さった当時の班長、査読トラブルで執筆者にお詫びに行って下さった当時の部長、外部からの複数のクレーム対応を引き受けて下さった、当時の副会長、執行理事、センター長、副センター長、ほんとうにありがとうございました。人間味の豊かな方ばかりで今も深く尊敬しています。

５．現在のパテント誌について

５．１　電子書籍化

突然のコロナ禍という事情もあったでしょうが、パテント誌の電子書籍化が実現できたことは大きな喜びです。担当ワーキンググループ、部長、副センター長の皆様にご尽力いただいたおかげです。海外では知財関係の雑誌は早くから電子書籍化されており、この日が来るのを待ち望んでいました。

５．２　法律専門誌としての地位の確立

初めて編集部に入った頃には、執筆依頼をしても、「読者が限定されているから」とお断りされることもありました。現在の特集企画の執筆陣を拝見しますと、日本弁理士会の外部でもパテント誌の重要性が認知されてきたように思います。

６．今後のパテント誌に求めるもの

６．１　編集作業のデジタル化

前述のとおり査読作業の負担が大きいため、誤字・誤記チェックソフトや剽窃チェックソフトがあれば、積極的に活用してもよいと考えます。先端技術を扱う弁理士の団体ですから、編集作業のデジタル化を推進しても罰は当たらないと思います。

６．２　新たな読者の獲得

パテント誌にはコアの読者層が存在しますが、若年層に訴求するような活動も必要かと思います。パテントコンテストにならって、学生や若手研究者を対象とした論文賞を創設する、などの試みはいかがでしょうか。

７．これからの会誌編集部へのメッセージ

会誌編集部は熱心な部員に恵まれていると思います。これからも良質な記事を発信してください。そして、ときどきは冒険に挑戦してください。

（原稿受領 2023.1.28）